

～職員に求められる「現場力」とは～

所属 社会福祉法人みどりの樹
NPO 法人地域生活応援団あくしす

寺田志のぶ
堀米美紀

1、はじめに

①今テーマの経緯

前年度の就労支援部会の活動として、働き方の多様性が求められている点に着目し、「働くってなに」というテーマの元、働く意義を再確認しました。調査の結果、「働く」ことは社会参加の一つであるという考えを持つ事業所が多く、ただお金を稼ぐためだけではなく、一人一人の生きがい・生きている証・役割・居場所・自分らしさ・人として大切なこと、などといった回答が多く見受けられました。

前年度の検証をふまえ、今年度は、就労における多様性をどのようにして利用者へ提供していくか、また、利用者、職員が楽しく安定して働くことのできる現場づくりのために、職員に求められるもの、「現場力」は何かということについて熟考するために研修会を企画する運びとなりました。

2、職員に求められるものとは

①現場力の意味

前述した「求められる現場力」というテーマで、令和2年1月17日に静岡県立大学短期大学部社会福祉学科准教授 松平千佳先生をお招きし、講演会を開催しました。

講演会では、まず初めに、「現場力」という言葉の意味について考えるために、他の言葉に置き換えて表現するワークを行いました。支援力・コミュニケーション能力・観察力・行動力などといった幅広い意見が挙がり、参加されたみなさんそれぞれが多種多様なことを求められていると感じている

こと、求められるハードルが高いと感じているということがわかりました。

②現場力を阻害するものとは

次に、前述した「現場力」が十分に発揮できないとしたら、その阻害因子とは何かを考えました。「打破する力の不足」や「自分の力を発揮する場の不足」などといった意見が挙がり、役割が明確化されにくい環境、業務であることも影響しているのではないかと考えられました。

また、その阻害因子は各個人の中にもあるのではないかという話題におよびました。今の自分と理想とする自分との間に存在する「劣等の意識」がどう作用するかによって、それは自分を鼓舞する力になる反面、閉鎖的にも攻撃的にもなりうるという先生のお話でした。研修では、小麦粉粘土を使い、自分の内にある阻害因子を形作り、グループ内で共有するワークを行いました。このワークを通し、自分を受け入れてくれる環境があり、そこで安心して気持ちの表出ができることで、劣等の意識がエネルギーとなることを感じられました。

③自己覚知・自己開示

自分の気持ちを内省するために、「気持ちの瓶」というワークをしました。気持ちを、言葉ではなく絵や色で表すことにより、今の自分をより意識し、整理することができました。先生からは、自分の気持ちを表出することは精神衛生上とても大切なことであり、安心して自分の気持ちが出出できる方法を持つことは重要であるとお話がありま

した。

自分を見つめ、振り返り、今自分がどういった状況にあるのかを知ること、自分の気持ちを表出すること、自分を大切にすること、またそれを共有することにより、相手や周りも大切にすることに繋がります。

支援者として、職員同士の関係としての、自己覚知や自己開示の大切さについて考えました。

3、まとめ

今回、一つのアプローチとして、松平先生をお招きし、参加された皆さんと「現場力」について考えていきました。

講演の中で松平先生は、「現場力」とは人間の側面を見出す人間力であると述べられていました。自分を見つめ発信していくこと、お互いを受け入れることができることにより、よりよい職場の雰囲気が作られていきます。自分を大切にできると、相手も大切にでき、それが現場の充足感に繋がることで、利用者の一人一人も楽しく安定して働くことに繋がっていくと考えました。

4、最後に

今回の講演会を通して挙げた、互いを開示し合える環境・関係性をどう現場に反映させていくのか、その取り組みを来年度の活動としていきたいと思えます。